

扇詩編の光と影

——『アナトールの墓』からマラルメの扇詩編を読む

馬 越 洋 平

Light and Shadow in the fan poems
— Reading Mallarmé's fan poems from *The Tomb of Anatole*

Yohei UMAKOSHI

Abstract

Mallarmé lost his eight-year-old son Anatole due to illness in 1879. *The Tomb of Anatole*, written for his son, was never completed and it was left as notes; however, the poet continues to live with the memory of his dead child. This essay aims to find a reflection of Anatole's death in the two fan poems “Madame Mallarmé's Fan” and “Another Fan for Mademoiselle Mallarmé”.

Mallarmé's mourning of the fan poem falling as ashes of death without being transmitted, in front of his wife who turns her back to the mirror, when we see these ashes as memories of the child's death, becomes even deeper. It echoes a conflict between the father who, wanted to turn his child into a poem and the mother, who couldn't understand her husband's attempt, when the child died.

In the last verse of “Another Fan for Mademoiselle Mallarmé”, we find Geneviève, who resuscitates her dead brother in her memories and thoughts, staring at the other shore at dusk. In Mallarmé, the dead are positioned on a fictional other shore created by thoughts. It is then inevitable to imagine that Geneviève thinks about his dead brother, because, geographically, the river seems to point to the Seine flowing near the tomb of Anatole.

In life, where there is light, there is shadow. The shadow of the Mallarmé family was created by dead Anatole and these fan poems tell us that in the Mallarmé family the dead child was living as memories.

はじめに

マラルメは、一八七九年、息子アナトールを病によって、八歳で亡くしてしまう。息子のために書かれた『アナトールの墓』は、完成されることはなく、覚書のまま残された。しかし、その死者の思い出を、詩人は背負い続けて生きてゆくのだ。それは、子供の死後に書かれた作品のなかに見出されるものである。本論では、妻と娘に宛てられた二つの扇詩編（「マラルメ夫人の扇 *Éventail de Madame Mallarmé*」、（マラルメ嬢の）もう一つの扇 *Autre éventail (de Mademoiselle Mallarmé)*）のなかにも、アナトールの死の反映を読みとりたい。「トリプティック」は、アナトールの死と結びつけて語られることの多かった作品だが、これらの扇詩編については、そのような読み方がされることはあまりなかった。

むしろこれらの扇詩編は、どちらかと言えば、マラルメのなかでは明るく軽やかな詩篇に分類されてきたものである。それは無理もないことで、マラルメの扇詩編とは、「おりふしの詩句」に見るように、もともと遊戯的な詩篇として扱われることが多い。扇という女性的なアクセサリに、宛先の女性への内密なメッセージを言づけるのだ。もちろんドマン版詩集に納められたこれらの二つの扇詩編は、その芸術的次元において異なるものであるが、いずれにせよ妻や娘への思いやりにみちた軽やかな詩編として読むことが主流であろう。

しかしこれらの扇詩編は、本当にそれだけですむ詩編なのだろうか。アナトールの死の記憶は、いまだに家族のなかに新しく、色褪せることはなかったのではないかと思われる。人生には常に光と影があるはずであり、マラルメ一家の影は、死んだアナトールの存在が生み出しているものである。この二つの扇詩編も死んだ子供の影の部分に注目したとき、家族の別の光景が見えてくるように思われるのである。それではまず、「マラルメ夫人の扇」から、死んだアナトールの影を探って読んでゆく。

I. 「マラルメ夫人の扇」—悲しい灰が降る

Avec comme pour langage	あたかも言語としてかのように
Rien qu'un battement aux cieux	天空へとひと煽ぎだけで
Le futur vers se dégage	未来の詩句は解き放たれる
Du logis très précieux	とても貴重な住処から
Aile tout bas la courrière	翼 声をひそめる伝言者
Cet éventail si c'est lui	この扇が、それが同じものならば
Le même par qui derrière	それによってお前のうしろで
Toi quelque miroir a lui	ある鏡が輝いた
Limpide (où va redescendre	清澄な (降ってくるのだ
Pourchassée en chaque grain	追い払われて、粉々となって
Un peu d'invisible cendre	僅かな目に見えない灰
Seule à me rendre chagrin)	それだけが私を悲しくさせる)
Toujours tel il apparaisse	いつもそれはかく現れよ
Entre tes mains sans paresse ⁽¹⁾	お前の手のなかで休むことなく

「マラルメ夫人の扇」は、制作時期は判明していないが、一八九一年の新年の記念に贈られた扇が自筆稿となる（一月一日）。この扇は、銀の地に赤いインクで詩句が書かれ、中央には、白い絵具で雛菊が、裏面には、小鳥と花の様子が描かれている。現在はジャック・ドゥーセ図書館に所蔵されている。最初に公表されたのは、ピエール・ルイスの編集する雑誌『ラ・コンク』の六月一日号である。

新年の記念に贈られた扇に書かれた詩であることからしても、この作品には、長年連れ添った信頼する妻への心遣いが詠まれているというのは、当たり前前の想定であろうし、その読みは一つの詩の読みとして間違っただけのものではない。様々な解釈ができる作品だが、死んだアナトールの影をそこに読み取るといかなる作品として現れるのだろうか。

第一詩節では、扇をあおぐマリーの姿が描かれる。扇はここで鳥に譬えられているが、「あたかも言語としてかのように」とあるように、これは解き放たれようとする詩句の隠喩でもある。扇が鳥のように「ひと煽ぎ un battement」だけで、「空に向かって aux cieux」、「とても貴重な住処 logis très précieux」とされる夫人の手から飛び立とうとしているのである。「書物について⁽²⁾」でも、マラルメは扇を詩に譬えているように、扇とは羽ばたきのリズムを生み出す、詩の視覚的形態なのである。

第二詩節では「扇」が「翼 声をひそめる伝言者 Aile tout bas la courrière」に言い換えられる。扇とは、詩のことであり内密な言葉を伝えるメッセンジャーである。当然これは、妻へと向けられたメッセージである。ここで登場する舞台装置が「鏡 miroir」である。扇を煽いでいるマリーが鏡に映っているのである。パタパタ

(1) OC. I, p.30.

(2) OC. II, p.219-220.

と動かす扇が鏡に反射して、鏡が光っているように見えるというのだ。これは、妻の持っている扇が銀色に輝いていることから生まれる光である。さらに、お前のうしろで鏡が輝いたとあるように、マリーが鏡に背を向けている光景であることが分かる。詩人は少し妻とはなれたところから鏡に映った扇を見ているのである。妻の持つ現実の扇と鏡に映った扇が同じものならばという措辞は、最終詩節の願望の表現につながる。

第三詩節は、形容詞（「清澄な」）と、括弧内の関係節が、すべて「鏡」を修飾し、鏡のなかに映った世界を物語る。ここで詩の雰囲気は暗くなる。鏡は「清澄な *limpide*」ものとされるが、括弧のなかにある不幸が映し出されるのである。「僅かな目に見えない灰」が降ってきて、詩人を深い悲しみに陥れるというのだ「*me rendre chagrin*」。これは卑近な意味としては、空気中に舞っている埃が降り続けることで、鏡が曇ることが悲しいというものである。そこで、埃を扇で追い払い、粉々にするのは夫人である。他の註釈家も指摘しているように、ここに塵を払うこと、すなわち家事を引き受けてくれている夫人へのささやかな感謝が込められていると読むことができよう。そこから、最終節の、扇を煽ぎつづけるようにという願望につなげて読むことができる。

だがこれでは、象徴という次元にはたどり着いていない。次に読み取りたいのが、妻へと飛び立った詩句が、妻の前で死んでしまって灰となって降ってくるという意味である。要するのには伝言者である詩句が、妻には理解されずに死んでゆくという意味である。ここには、妻の自らの芸術に対する無理解を嘆いているマラルメの姿を見ることができる。さらに鏡というシュミラクル、つまり虚構の世界に背を向けて座る妻の姿にも、夫の住む虚構の世界が見えていないことが仄めかされているように思う。それでも最後の詩節で、マラルメは妻に扇をあおぎつづけるように願ひ、いつかは妻にも自分の追い求めている詩の世界を理解してほしいと締めくくられる。

それでは、まさにこの夫婦の関係性にかかわることだが、死んだ子供の影を作品に探してみよう。それは第三詩節の「僅かな目に見えない灰／それだけが私を悲しくさせる *Un peu d'invisible cendre/ Seule à me rendre chagrin*」という詩句に表されている。原大地も指摘しているように⁽³⁾、「灰 *cendre*」には「遺骸」の意味があるのであり⁽⁴⁾、この「灰」は、夫婦にとっての最も身近な死者アナトールのことを暗示している。*chagrin* という言葉も死別の悲しみなどに用いられる重い言葉であり、子供の死の意味を表すのには相応しい。つまりこれは、アナトールの死の記憶が、たとえ扇で振り払っても夫婦の間に永遠にふり続ける情景と読める。夫婦の生活にアナトールの死の影が重くのしかかり、常に悲しみに覆われたものとなっていることが伺われるのである。

死んだ息子の影をそこに読み取ると、妻には詩のメッセージが理解されないという詩人の嘆きもいっそう悲劇的なものとして見えてくる。妻には詩が分からないという趣味の話ではすまされなくなるのである。アナトールの死のときに、死んだ子供を詩として復活させようとする父と、それを理解せずあくまで実在の子供を求めた母とが対立したことも思い出させるからである。子供の死という共通の悲劇を通して、虚構の世界に住む父と、現実の世界に住む母はすれ違ってしまったのである。ここには夫婦が虚構と現実の世界に分かれて背を向け合い、慰め合えなくなってしまった痛ましい体験も反響して聞こえてくるのである。

無論、『アナトールの墓』に描かれているように⁽⁵⁾、母もついには子供の死を受け入れ、この悲劇を乗り越えるために夫婦は寄り添いあって生きていったと信じたいが、子供の死に際して生まれたすれ違いは、やはりその後の夫婦関係にも影を落とし続けたように思われるのである。夫婦の間には、愛や信頼は残っていたのだろうが、子供が生きていた頃に比べると、二人のあいだに心理的な距離が生まれてしまったことは否めないだろう。夫婦の人生の影の部分、マラルメは嘘偽りなくこの詩のなかにそっと描きこんだと言える。

もちろん、夫婦関係を語るのであれば、マラルメの女友達のメリー・ローランのことも考えなければいけな

(3) 原大地『マラルメ 不在の懐胎』、慶應義塾大学出版会、2014、p.314-315。

(4) リトレ辞典は、「灰 *cendre*」は、「死者の遺骸（遺体を焼く古代人の慣習からくる句）そして隠喩的には死者の思い出」の意味があると説明している。

(5) 『アナトールの墓』の最後は、夫婦の子供の墓の前での再会という、対立していた父と母が和解する場面となることが予定されていた。

い。メリーのことを論じるのは本論の手に余るが、筆者には、メリーは、子供の死によってできた夫婦の心理的な隙間にそっと忍び込んできた女であるように思われる。愛の象徴である薔薇の花が咲き誇るメリーに送られた扇詩編⁽⁶⁾と比べても、「マラルメ夫人の扇」は枯れた世界であり、夫婦のあいだにすれ違いが生まれ始めるのは、子供の死からであったと言ってもおかしくはないのである。

ここまで「マラルメ夫人の扇」をアナトールの死の影に注目して読んできた。死んだアナトールの影を通してこの詩を読むと、息子の死をめぐる父と母のすれ違いの悲劇も、同時に陰画のように浮かび上がるのである。

II. マラルメ嬢の扇—彼岸を統べる娘

Ô rêveuse, pour que je plonge	おお夢みる娘よ、私が飛び込むために
Au pur délice sans chemin,	道なき純粋な愉悅へと、
Sache, par un subtil mensonge,	繊細な嘘によって握っていると知ってほしい
Garder mon aile dans ta main.	私の翼を お前の手のなかに。

Une fraîcheur de crépuscule	夕暮れの涼しさは
Te vient à chaque battement	煽ぐごとにお前へと訪れる
Dont le coup prisonnier recule	捕われの羽ばたきが地平線を
L'horizon délicatement.	やさしく後退させる。

Vertige ! voici que frissonne	眩暈だ！空間が
L'espace comme un grand baiser	大いなる接吻のように震える
Qui, fou de naïtre pour personne,	誰かのために狂おしく生まれようと
Ne peut jaillir ni s'apaiser.	噴出することも、鎮めることもできない。

Sens-tu le paradis farouche	未開の天国をお前は感じているか
Ainsi qu'un rire ensevli	埋もれた笑いのような
Se couler du coin de ta bouche	お前の口の隅から流れてゆく
Au fond de l'unanime pli !	なべてひとしい襷の奥で！

Le sceptre des rivages roses	薔薇色の岸辺の王笏
Stagnants sur les soirs d'or, ce l'est,	黄金の夕べのうえに漂う、これがそれ
Ce blanc vol fermé que tu poses	お前が置く閉じられたこの白い飛翔
Contre le feu d'un bracelet. ⁽⁷⁾	プレスレットの火に凭れかけた。

「マラルメ嬢の扇」は、雑誌『批評』に、一八八四年に発表されたものである。自筆原稿は、白地の扇に赤

(6) 「メリー・ローラン夫人の扇」(OC. I. p.68.)は、「薔薇の模様をあしらった扇の金地のうえに、白いインクで書かれて、詩人からメリー・ローラン夫人に一八九〇年に送られたもの」らしい。その内容は、薔薇の扇が、つれないメリーの口元に、花開いて、髪の間をもほどき、陶醉した花のような笑みが溢れることを歌うところから始まる。今度は、扇の風にさらされるメリーが、薔薇と変わり、その馥郁たる香りを閉じ込めるものは、なにもないという女性美への賛美に終わる。マラルメの詩のミューズであり、エロスの対象であったメリーを歌ったこの扇詩篇の華やかさは、悲しさの漂う妻宛の扇詩編とは対照的である。男女間の心理分析には慎重にならなければならないが、メリー宛の書簡のなかで「君に対しては、私が人に持ちうると思える最も可憐な感情を持つ」(一八八九年八月九日)と語ったメリーとの関係も、アナトールの死がなければもう少し違ったものになっていたのかもしれない(引用したメリー宛の書簡は以下を参照 Stéphane Mallarmé, *Correspondance 1854-1898*, édition établie, présentée et annoté par Bertrand Marchal, Gallimard, 2019, p.795)。

(7) OC. I. p.31.

いインクで詩句が書かれている（マラルメ美術館所蔵）。ヴァリエーションがあるが、それらを参照しつつもここでは決定稿を扱う。この作品は、アナトールの死後、創作から遠ざかっていたマラルメが最初に書いた作品である。これは、「アナトールの墓を覆う布を取り払った⁽⁸⁾」作品であると評されるほど（ジャン＝リュック・ステンメッツ）、喜びや軽やかさに満ちたものであると言われてきた。

ジャン＝リュック・ステンメッツの指摘の通り、マラルメはここで、美しく成長した娘ジュヌヴィエーヴを讃えた詩を書くことで、子供の死以来、詩人や、家庭に漂っていた暗い雰囲気を追いかけていたのかもしれない。確かに、基本的には、扇をあおいで涼を取る娘のなかに、生命や詩がもたらす喜びを歌った作品として読み進めたのでいいだろう。だが、アナトールの死を知る者には、最終詩節で作品が静かな雰囲気に包まれるとき、死んだ子供の影がふと差すように思われるのである。

この作品では、扇が娘に語りかけることで、作品が展開されている。扇は、ほとんどマラルメの分身と言ってもいい。この扇は冒頭で、娘に「おお、夢みる娘よ Ô rêveuse」と語りかける。夢みることは詩人の習性であり、うっとりとした目をしたジュヌヴィエーヴにも、夢みることの資質をマラルメは感じとっていたのだろう。扇は、「繊細な嘘によって un subtil mensonge」自らをにぎる術を知ってもらい、この娘をある「逸楽」の道連れにしようとしているのである。

この「繊細な嘘 un subtil mensonge」とは、「扇」を羽ばたいている鳥に見立てることを指している。また鳥をとらえている手が、同時に鳥の羽ばたきを演じているのだから、この嘘は実に巧妙なものなのである。嘘によって羽ばたくこの「翼」こそ、詩の象徴である。したがって、「道なき純粋な愉悅 pur délice sans chemin」とは、無意識的な喜びのすべて、扇の涼風のもたらす愉悅と、それに重ね合わされる詩の言葉がもたらす夢の愉悅である。

まず、第一義的な扇の送る風の心地よさの意味から取ってゆく。第二詩節では、扇にあおがれて届けられる黄昏の風の涼しさが、宇宙的なスケールで歌われる。娘にとらえた羽ばたきが、「地平線を優しく後退させる」というのだ。娘が扇を打つたびに、空がゆっくりと暮れてゆく光景を歌っているのだろうが、これはあたかも星が回って、明るい地平線が遠のいてゆくように見えるということだろう。娘は夕暮れの光を扇によって支配しているようである。

第三詩節では、扇が娘を誘った逸楽が、ある絶頂を迎えようとする。夕暮れの荘厳さと風の涼しさが極まって、「眩暈 Vertige」が訪れるのである。空間は風によって振動し、抑えられない「接吻 baiser」を、抑えようともがく恋人のように打ち震えているのである。

これらは夕暮れの風の心地よさを感じていることを歌っているだけでなく、それに重ね合わせて、詩的言語によって宇宙空間が変容してゆくさまを表しているのである。古いヴァリエーションでは、「眩暈 Vertige」が「純粋な戯れ Chaste jeu」、「広大な戯れ Vaste jeu」であったことからしても、扇がもたらすの詩の遊戯のなかで、ジュヌヴィエーヴが、虚構のもたらす愉悅に浸っていることをも暗示する。

第四詩節では、扇によってうち震える空間が、「未開の天国 le paradis farouche」⁽⁹⁾と呼ばれる。恍惚となった娘は、笑いを扇の襞の奥に隠すと同時に、この天国を内心では感じているのだ。これは、夕暮れの涼風のなかにある心地よい天国、いやその向こうにある、詩句によって生まれる天国なのだ。これこそ、虚構の天国というべきものである。

(8) Jean-Luc Stéinmetz, *Stéphane Mallarmé, l'absolu au jour le jour*, Fayard, 1998, p.227.

(9) マルシャルは、マラルメの扇詩編の特徴として、扇が天空の宇宙的な空間と特権的關係を結んでいると述べる。そしてこの空間は、しばしば天国の形象のもと表されることをいくつかの例を挙げて解説する。「おりふしの詩句」では、1「翼 いかなる楽園を選ぶのか Aile quels paradis élire」、2「古の翼よ、我に与えよ／息吹のなかに地平線を Aile ancienne, donne-moi/ L'horizon dans une bouffée」11「開かれたこの翼でもって私に連れてこい／ある永遠の笑いの零れる息吹を。Avec cette aile ouverte amène-moi/ Quelque éternelle et riieuse bouffée.」、13「魂でもって果てまで／空の奥、閉じられた手でもって／ドーファン夫人によって取られた／時間の翼、君は自らを閉じる Spirituellement au fin/ Fond du ciel, avec des mains fermes/ Prise par Madame Dauphin, Aile du temps, tu te refermes.」を挙げ、最後に「マラルメ嬢の扇」の楽園を引く。そしてマルシャルは、この空間が、扇の姿をした詩が創りだす、虚構的空間であると述べている。Rien qu'un battement aux cieux... L'éventail dans le monde de Stéphane Mallarmé, LIENART musée département Stéphane Mallarmé, 2009, p.32-33.

第五詩節では、ここまでのダイナミックな展開から大きく変わって、スタティックな展開に終わる。虚構の王国を統べる扇は閉じられて、「王笏 sceptre」となり、夕日の反射する「ブレスレット bracelet」の上に置かれる。美しいジュヌヴィエーヴの眼差しが、夕日が映しだされている岸辺に注がれる。「薔薇色の岸辺 rivages roses」と言われるこの川を挟んだ彼岸も、言葉、すなわち、思考によって生まれる虚構の「彼岸」のイメージがあるのであり、ジュヌヴィエーヴは、この「彼岸」を統べる女王であるのだ。ここまで続いてきた虚構の天国は、この虚構の「彼岸」のイメージのなかに集約されるのである。

この詩のなかに、アナトールの影が生まれる場所があるとしたら、最後の詩節であろう。黄昏の風景は死を連想させるし、笑みを隠すための扇をたたんだ娘はもう笑ってはおらず、暮れなずむ岸辺をじっと見つめているのだ。なにより大事なものは、最後の詩節に現れるイメージである虚構の「彼岸」は、マラルメが『アナトールの墓』のなかで追及したテーマであることだ。

マラルメは『アナトールの墓』で、「彼岸」という言葉によって、この世のなかに死者の住む新しい場所を創り出そうとしていた。キリスト教は、死後の世界に死者は住んでいると教え、此岸と彼岸を分断してしまうが、一方マラルメは、「余波 我々の愛のなかで息絶えた永遠—かれは我々を彼岸へと延長する 我々を考える存在にして—（代わりに我々は彼に命を返す *contrecoup éternité expirée en notre amour — il nous prolonge au delà en nous faisant penseur — (en échange nous lui rendons vie)* (121)⁽¹⁰⁾とあるように、この「彼岸」は思考によって生み出されるものと捉え、これを此岸で生きている者が続べなければいけないと説いている。マラルメにとって「彼岸」とは思考による理念の世界のことであり、この虚構の「彼岸」に死者をも位置付けるのである⁽¹¹⁾。死者の住む彼岸に、思考によって、今ここで、生者は死を待たなくとも辿り着くことができるのである。死者の精神（「神性」）を心のなかに宿した者には、それが可能なのである。

つまり最後の詩節で、向こう岸、虚構の「彼岸」を見つめるジュヌヴィエーヴの姿には、死んだ弟のことを想う姉の姿を読みとることができるということである。これはジュヌヴィエーヴが、思考によって死んだ弟と再会している光景となっているのだ。ジュヌヴィエーヴは、『アナトールの墓』のなかで、両親の死後、墓の前で、思考と記憶によって、家族全員を結びつける役割を託されていたのであるからなおさらである「そしてお前 彼の姉であるお前は、いつの日か—（彼の死以来開かれた 私たちの死ときまで私たちを追いかけてくるこの深淵—そこに私たちお前の母と私が降りるときまで）お前はいつの日か、お前の思考、記憶において私たち三人を結び付けなければならない—たった一つの墓に納めるように 道理に従って お前はこの墓を訪れるものだ お前のために作られたのではないこの墓を *et toi sa sœur, toi qui un jour — (ce gouffre ouvert depuis sa mort et qui nous suivra jusqu'à la nôtre — quand nous y serons descendus ta mère et moi) dois un jour [2] nous réunir tous trois en ta pensée, ta mémoire — — — de même qu'en une seule tombe toi qui, selon l'ordre, viendras sur cette tombe, non faite pour toi —* (59, 60)。

そもそもこの作品の岸辺は具体的には、アナトールの埋められているサモロー墓地のそばを流れるセーヌ川の岸辺を指していることは、ヴァルヴァンがマラルメにとって重要な詩を書く場所であったことから明らかである。セーヌ川は幼いころからの姉弟の思い出の場であり、優しい姉は弟の墓に足繁く通って、弟に想いを凝らしていたと伝えられているのである⁽¹²⁾。ジュヌヴィエーヴが死んだ弟のことを想いつつ、セーヌの岸辺に佇んでいた日は歴史のどこかに確実にあったのである。これはヴァルヴァンのセーヌの岸辺という地理的な点からしても、姉が弟のことを思い出している情景として読むことができるのである。

人生には、光があれば影がある。一見華やかに見える光景にも、その奥に隠されたものがあるのだ。アナトールの死が家族に与えた深い悲しみを知る者にとっては、この扇詩編は、死んだ弟に想いをよせる姉の姿がふと

(10) 引用文の番号は、すべてマルシャル編纂の新ブレイヤード版マラルメ全集の『アナトールの墓』の番号。

(11) マラルメは、『アナトールの墓』の断章をなす紙片 83-87 で、内的で想像的な「彼岸」について解説している。そこでもやはり、マラルメは、死者の居場所を、人間の内的な空間に位置づけることで、死を非現実化する。死者は、死者に向けられる愛や関心によって常に我々のなかに蘇るのである。「彼岸」と「此岸」は、生者の思考によって繋がり、死者との再会は生きながらに可能になると語る。

(12) Marie-Thérèse Stanislas, *Geneviève Mallarmé-Bonniot*, Nizet, 2007, p.9.

浮かびあがる作品となっているのである。

終わりに

妻と娘に捧げられた扇詩編のなかから、アナトールの死の影を読みとってきた。息子が死んだ後のマラルメ一家には、マリーとジュヌヴィエーヴという二人の女性が残されたのであり、マラルメは、扇という女性的なアクセサリーのもと、妻と娘それぞれに詩のメッセージを伝えていたのだった。その家庭の光景にはやはり、亡きアナトールの「影 ombre」が映りこまざるを得ないのである。

「マラルメ夫人の扇」では、鏡に背を向ける妻の前では、扇の詩句のはばたきが伝わることなく死の灰となって降ってくるという嘆きが、この灰を子供の死の思い出と見るとき、さらに深いものとなるのだった。それは、子供の死のときの、子供を理念に変えようとする父と、それを理解できない母との対立の記憶まで呼び起こしたのである。

「マラルメ嬢の扇」では、最後の詩節で、死んだ弟を、記憶と思考のなかに呼び起こすジュヌヴィエーヴの姿を読みとった。マラルメにおいては、死者は、向こう岸、虚構の彼岸のなかに位置づけられるのだ。特にそれは、この川が、アナトールの墓碑の近くのヴァルヴァン、あるいは、サモローの傍を流れるセヌを指していると思われるがゆえに、ジュヌヴィエーヴが死んだ弟を想っていると読むのは必然性があるのである。

『アナトールの墓』に「弟 姉 否 不在の者が現前する者よりも存在しないことは決してない— frère sœur non jamais l'absent ne sera moins que le présent —」(33) とマラルメは書いた。マラルメにとって、思考を介して、死者は生者と同等に存在するのである。マラルメが、最晩年の夫人宛の書簡のなかで、「私は今日墓地に行った。というのも私たちは、ずっと四人だったのだから」¹³⁾と語っているように、マラルメ一家は、アナトール亡き後も四人家族であったのであり、その貴重な存在はこれらの扇詩編にも描きこまれていたのである。

〈参考文献〉

マラルメのテキスト・書簡（註も含む）

- Stéphane Mallarmé, *Œuvres complètes* I, édition présentée, établie et annotée par Bertrand Marchal, «Bibliothèque de la pléiade», Gallimard, 1998. (OC. I と略記)
- Stéphane Mallarmé, *Œuvres complètes* II, édition présentée, établie et annotée par Bertrand Marchal, «Bibliothèque de la pléiade», Gallimard, 2003. (OC. II と略記)
- Stéphane Mallarmé, *Poésies*, Gallimard, Édition de Bertrand Marchal, Gallimard, 1992.
- Stéphane Mallarmé, *Divagations Igitur Un coup de dés*, éditions de Bertrand Marchal, Gallimard, 2003.
- Stéphane Mallarmé, *Documents* VI présentés par Carl Paul Barbier, Nizet, 1977.
- Correspondance inédite de Stéphane Mallarmé et Henry Roujon* recueillie et commentée par Mme C. Lefèvre-Roujon Genève : P. Cailler, 1949.
- Stéphane Mallarmé, *Correspondance 1854-1898*, édition établie, présentée et annotée par Bertrand Marchal, Gallimard, 2019.
- 『マラルメ全集 I 詩・イジチュール』、筑摩書房、2010
- 『マラルメ全集 II ディヴァガシオン他』、筑摩書房、1989
- 『マラルメ全集 III 言語・書物・最新流行』、筑摩書房、1998
- 『マラルメ全集 IV 書簡 I』、筑摩書房、1991
- 『マラルメ全集 V 書簡 II』、筑摩書房、2001
- 『マラルメ詩集』(渡辺守章訳)、岩波書店、2014
- 『マラルメ詩集』(加藤美雄訳)、関西大学出版会、1987

マラルメの研究書

- Stéphane Mallarmé, *Pour un tombeau d'Anatole*, introduction de Jean Pierre Richard, Éditions du Seuil, 1961.
- Bertrand Marchal, « Anatole et « la tragédie de la nature » » *Europe*, 1998, p.204-211.
- Bertrand Marchal, *Lecture de Mallarmé*, José Corti, 1985.
- Bertrand Marchal, *La Religion de Mallarmé, Archéologie, anthropologie, utopie*, Thèse de doctorat, Université de la Sorbonne Nouvelle. José Corti, 1988.

¹³⁾ Stéphane Mallarmé, *Correspondance 1854-1898*, édition établie, présentée et annotée par Bertrand Marchal Gallimard, 2019, p.1751. 一八九八年五月八日付の書簡。

- Gardner Davies, *Les "tombeaux" de Mallarmé : essai d'exégèse raisonnée* José Corti, 1950.
- Jean Pierre Richard, *L'univers imaginaire de Mallarmé*, Éditions du Seuil, 1961.
- Paul Bénichou, *Selon Mallarmé*, Gallimard, 1995.
- Jean-Luc Stéinmetz, *Stéphane Mallarmé, l'absolu au jour le jour*, Fayard, 1998.
- André Vial, *Mallarmé Tétralogie pour un enfant mort*, José Corti, 1976.
- Nobuo Takeuchi, «De la notion de divinité chez Mallarmé — Un essai d'approche de la pensée mallarméenne», *Études de Langue et Littérature Françaises n.32 Tokyo*, 1978, p.46-77.
- Rien qu'un battement aux cieux... L'éventail dans le monde de Stéphane Mallarmé*, Lienart, musée département Stéphane Mallarmé, 2009.
- Marie-Thérèse Stanislas, *Geneviève Mallarmé-Bonriot*, Nizet, 2007.
- ステファヌ・マラルメ ジャン＝ピエール・リシャール『アナトールの墓のために』(原大地訳)、水声社、2015
- ジャン＝リュック・ステンメッツ『マラルメ伝—絶対と日々』(柏倉康夫・永倉千夏子・宮崎克裕訳)、筑摩書房、2004
- ジャン＝ピエール・リシャール『マラルメの想像的宇宙』(田中成和訳)、水声社、2004
- ギィ・ミショー『ステファヌ・マラルメ』(田中成和訳)、水声社、1993
- 熊谷謙介 マラルメの「喪の日記」?—『アナトールの墓』分析、人文研究 No.184、2014
- 菅野昭正『ステファヌ・マラルメ』、中央公論社、1985
- 野内良三『マラルメ序説 詩と偶然』、審美社、1981
- 柏倉康夫『生成するマラルメ』、青土社、2005
- 佐々木滋子『祝祭としての文学』、水声社、2011
- 永倉千夏子『彼女という場所』、水声社、2012
- 大出敦編集『マラルメの現在』、水声社、2013
- 原大地『マラルメ 不在の懐胎』、慶應義塾大学出版会、2014
- 『ユリイカ 9月臨時増刊 総特集＝ステファヌ・マラルメ』、青土社、1986
- 『ユリイカ 一九七九年十一月号』、青土社、1979

その他

- Vladimir Jankélévitch, *La mort*, Flammarion, 2012
- V. ジャンケレヴィッチ『死』(仲沢紀雄訳)、みすず書房、1978
- V. ジャンケレヴィッチ『死とは何か』フランソワーズ・シュワップ編、(原章二訳)、青弓社、1995
- アン・K・フィンクベイナー『子供を亡くしたあとで』(高橋佳奈子訳)、朝日新聞社、1997
- 若林一美編『亡き子へ：死別の悲しみを超えて綴るいのちへの証言』、岩波書店、1949
- 浅見洋二『二人称の死 西田・大拙・西谷の思想をめぐって』、春風社、2003